民博
情報コーナー図書

奈良県立

（通巻第13号）

民俗博物館だより

Vol. Ⅳ No. 3
1977. 10. 5

六斎念仏（奈良市八嶋町）

目　　次

特別テーマ展「念仏信仰について」 …… 1
近畿のおもかる石 …… 3
国中の農家～大和棟～ …… 5
博物館の利用状況 …… 7
お知らせ・表紙写真解説 …… 7

特別テーマ展示

念仏信仰について

～六斎念仏と百万遍念仏を中心に～

奥野義雄

はじめに―展示の目的―

わが国に仏教が伝来して以後、仏教が民衆の生活の場である農村や町に定着した時期から仏教の教理（おしえ）は、「ナムアミダブツ」という平易な念仏で受け容れられてきた。この民衆の生活に根差した念仏信仰が、どのように四季それぞれの行事に表現されてきたかを、また民衆の念仏信仰として展開していった時期はいつごろであるのかを追究することが、今回の特展の狙いである。

したがって、民衆の念仏信仰の中で、寺院宗派と直接結びつくことがない六斎念仏、百万遍念仏、双盤念仏、踊り念仏をはじめ、今日も派々と生きつづけている地蔵信仰や「百姓の神さま」と呼ばれながらも念仏を唱える庚申信仰かつ農耕儀礼と結びついた練供養などを展示を通じて紹介していくが、ここでは六斎念仏と百万遍念仏についての調査成果と今後の課題について触れたい。

二つの六斎念仏

六斎念仏とは、空也上人と松尾明神との伝承に始まり斎日に念仏を申すことに由来するが、この六斎日に申す念仏にはその伝承によって鉦（鐘）や太鼓を伴なっている（六斎念仏の起源についてはここでは省略する）。この空也以後も一遍やその弟子たちによって農村や町に流布していったが、被布教側の一般民衆は彼らの生活の場である村や町で信仰深い有志や村・町ぐるみでこの六斎念仏を受け止めていった。今日のこる県下のいくつかの六斎念仏は先祖が受け容れたものを口伝えで継承されてきたといえる。

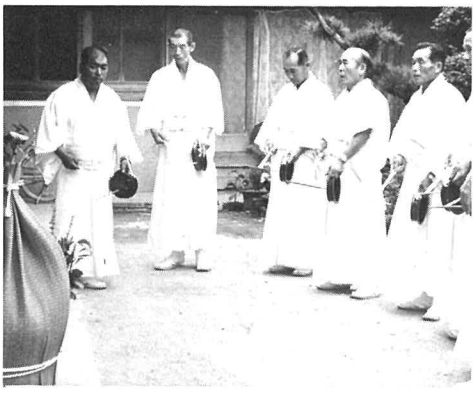
この六斎念仏は二つの系統をもち、京都系と高野系であり、京都系は千栄山光福寺系と空也堂系に分流する。高野系は高野山を基盤として下天野の六斎を本幹としてきた。

この二系統の六斎念仏が大和・奈良県にどのように入ってきたかは速断しがたいが、それらの特色を大雑把にいえば、京都系の六斎には鉦と太鼓が念仏に伴なうことであり、高野系では鉦を打ち鳴して念仏を申すことであろう。

奈良県下では、京都系の六斎念仏と考えらるのは奈良市八嶋、秋篠町、法華寺町地域の六斎念仏で、現存するのは八嶋地区のみである。同地区ではお盆の時に頭屋の家で六斎念仏を唱えるが、六斎（六曲）の内三斎は太鼓を打ち鳴らすことによってそれに替わる。

一方、高野系といまのところ断定しがたいが、御所市東佐味地区で現存する六斎念仏は鉦を打ち鳴らして六斎（六曲）の念仏を申す形態が継承されている。この地区では、春秋彼岸・盆・十夜・涅槃そして葬式のときに六斎念仏が唱えられている。

これらの六斎念仏のほか、現存するもの（安堵村東安堵、奈良市池田町地区など）からすでに絶えたもの（奈良市南古市、同東佐紀町、同大安寺町、御所市吐田、同西佐味などの地



御所市東佐味の六斎念仏

奈良市八嶋の六斎念仏

区）まで数多いが、ここでは省略する。

百万遍念仏にみる供養と祈願の諸様相

百万遍念仏には、周知のごとく一人が期日を限って、百万遍の念仏を唱える如法真修と複数人が唱える念仏の総和を百万遍にする略法草修とがある。後者の略法草修に大念珠が伴ない、千八十顆あるいはその倍数の大念珠を繰りながら念仏を一顆ごとに一唱するのである。

前者は、『栄華物語』や種々の『往生傳』にみられるごとく単独で百万遍の念仏を唱えるのであるが、この百万遍念仏の信仰意図は、

延暦寺阿闍梨教真。（中略）。生年三十以後。毎月二介度。必修百万遍念佛。以為往生極楽之因。大都日別。修十万遍念佛。

という『三外往生記』にみる文言からも〈往生極楽〉にあった。[註(1)] この〈往生極楽〉を意図することは同記に散見する。また、期日を限って百万遍念仏を申すことも諸『往生傳』に多く窺える。その一例を繙（ひもと）くと、『拾遺往生傳』に「爰康和元年九月十三日。参天王寺。修念佛行。經九箇日。滿百萬遍」とあり、[註(2)] この場合は九日間で百万遍念仏を修したことになる。

一方、数珠繰りを伴なう百万遍念仏は、一説には鎌倉初頭に始まるともいわれるが、その史料存在をみない。江戸時代の『俚言集覧』には百万遍念仏における数珠繰りについての記載、つまり「信者連坐して大念珠をくりして念仏をする」云々という文言がみえ、他説の江戸時代中葉に数珠繰りの百万遍念仏が始まったとする方がより事実に近いのではないかと考えるが、現在のところ実証する手掛りをもたないため速断しがたいところであろう。また、創始時期とともに単独で百万遍念仏を修する所謂如法真修と数珠を伴なう百万遍念仏とのかかわり方についても現在のところ明らかではない。この点についても今後、私たちの課題として存在するとともに、資料・文献史料の調査を待たねばならないところである。

結びに―今後の課題によせて―

ここでは六斎念仏と百万遍念仏にみる信仰のあり方を垣間みてきたが、六斎念仏が大和にいつごろから流布してきたかという点や二系統の六斎念仏がどのような形態で大和の各地に定着していったかという点、さらに大和では大寺院や旧来の寺院とのかかわりで六斎念仏が流布されてきたのか、否かという点なども今後の課題として眼前に存在しているといわねばならない。

一方、すでに触れたが、百万遍念仏についても二種の百万遍念仏がどのようにかかわって来たかという点や数珠を伴なう百万遍念仏が多様な内容を盛り込んだものとなってきた展開過程やそれらの時期については明らかではなく、今後検討していかねばならない点であるといえる。

このように二つの念仏信仰においても、いくつかの課題を私たちに提起せしめるごとく、ここで触れなかった他の念仏信仰においてもいくつかの問題点があり、それぞれの領域で検討しなければならないであろう。

註(1)～(2)　『続群書従類』第九輯下所収

▲ 大和郡山市矢田町の百万遍念仏

▲ 先祖供養である（同左）

民博 博報コーナー図書

近畿のおもかる石

東洋大学教授
大島建彦

『定本柳田國男集』第三十巻の「石占の種類」には、「神の石に祈誓をして吉凶成否を占う方法は、勿論軽重の感じに由るものが最も例が多い」と説かれている。たしかに、この石占の方式は、古来の文献を通じて、すこしずつあらわれてくる。たとえば、『万葉集』巻三の「石田王の卒りし時、丹生王の作る歌」(４２０)には、「夕占問ひ石占もちて」とうたわれている。この「石占」というのは、『万葉集攷證』の説のように、「石の軽重によりて、物の吉凶を定むる術」と解される。また、『塵袋』巻一には、「サイノ神トテ、小社ニマロキ石ヲヲクハ、石神欤」とあって、「此ノ神ニ祈テコトノ成否ヲトフ時、石ニツケテ軽重ヲ定ル」とも記されている。狂言の「石神」によると、ある女が離婚の決意をかためるために、出雲路の夜叉神にむかって、「上がらせられたならば、親里へ戻りましょうず、また上がらせられずは、ただいままでの夫に添いましょう」と念じた上で、小歌の節にあわせてあげようとした。しかし、その夫が石神になりすまして、懸命にふんばったので、どうしてもあがらなかったというのである。この出雲路の夜叉神とは、京都市上京区の出雲路幸神社にあたるものと思われる。また『雲根志』前編巻一および三編巻三には、近江水口の近辺の天神石をはじめ、いくつかの天神石や軽重石があげられているが、ここでこまかに説くゆとりはない。

ところで、石の軽重によって、物の吉凶をうらなうことは、現行の民俗としても、すくなからずおこなわれている。しかも、それらの事例の分布は、かなり著しくかたよっている。さしあたり、山梨県を中心に、その周辺の都県にかけては、そのような石占の事例が、あげ仏、あげ地蔵、うかがい地蔵などと称してもっとも多く知られている。この地方のあげ仏などについては、『西郊民俗』の六十四号以後に、いくつかの報告を掲げてきたが、近刊の『仏教民俗とその周辺』に、「あげ仏の伝承」としてまとめる予定である。また、岐阜県南部から愛知県西部にかけて、同じような石占の事例が、おもかる石、おもかる地蔵、抱き地蔵などと称して、たいそう多く認められる。この地方のおもかる石などについても、いっそうこまかな調査を進めた上で、また別の機会にまとめてみたい。それに対して、近畿地方の各府県に、あげ仏やおもかる石にあたるものが、どれだけ多く伝えられているか、まだよく確かめられていない。ここでは、私の知るかぎりの事例を掲げて、これからの調査のためにそなえたいと思う。

(1)三重県桑名市栄町　玉光稲荷　おもかるさま

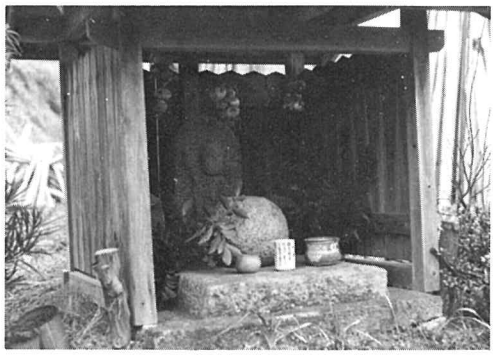
玉光稲荷の社殿の内に、擬宝珠形の自然石があり、その社殿の外にも、兜形の自然石があって、ともにおもかるさまとして知られている。この社に参る人々の中には、この石にうかがいをたてるものもすくなくない。願いがかなうようならば、軽くあがってほしいなどと念じて、この石をもちあげるのである。願いがかなうかどうかは、軽くあがるかどうかで知られるという。誰でもうかがいをたてることができるが、この社の神官も、信者から頼みをうけると、かわりにうかがいをたてている。（安藤隆二氏談）

(2)三重県桑名市走井山　お菊稲荷　おもかる石

お菊稲荷の社殿の前には、頭大の卵形の自然石があって、やはりおもかる石として知られている。この社に参る人々の中にも、この石にうかがいをたてるものがすくなくない。その隣の霊狐廟にも一つのおもかる石がおかれている。（堀田吉雄氏『東海の伝説』）

(3)滋賀県甲賀郡甲賀町小佐治　うかがい石

小佐治の全域にわたって、地蔵の前や祠堂の中に、それぞれ一つの丸石があって、うかがい石という名で知られる。土地の人の話によると、どこの地蔵の前にも、そのような石がおかれていたという。古々路の会の調べたものには、十二のうかがい石があげられており、大きなもので直径２５



うかがい石（滋賀県甲賀町小佐治）
津山正幹氏撮影

センチ、小さなもので直径１５センチであったと記されている。家内のもめごとなど、どのような悩みごとについても、この石にうかがってみる。そのときには、「よいことがあれば、軽くあがってください、悪いことがあれば、重くすわってください」などと唱えながら、この石をもちあげるのである。信心のあつい人であれば、誰でもこの石にうかがうことができる。ただし、里の大日堂では、近所の農家のおじいさんが、きまってうかがい石をもちあげて、何でもうかがいをたててくれたという。（古々路の会「甲賀小佐路の民間信仰」『昔風の当世風』八号）

⑷京都市下京区仏光寺通河原町西入富永町　勝円寺　うかがい地蔵

この勝円寺は、浄土宗の知恩院派に属している。その本堂の一隅に、地蔵の石像がまつられておりうかがい地蔵さんとして知られている。高さ３０センチほどの坐像で、後からもちあげては、さまざまなことをうかがう。はじめに「お軽うなってほしい」といい、つぎに「重うなってほしい」といって、くり返しもちあげるが、そのとおりになると、思いがかなうという。かつては、お参りにくる人もたえなかったが、このごろでは、そのような人もめったにいない。（拙稿「あげ仏資料」『西郊民俗』七十号）

⑸京都市伏見区深草薮ノ内町　伏見稲荷大社　おもかる石

稲荷山の登り口には、奥社の奉拝所があって、その社殿の傍に、二つの石灯籠がたてられている。その頂の宝珠が、世におもかる石として知られている。この石をもちあげて、軽ければ願いがかなうが、重ければ願いがかなわないという。（竹村俊則氏『新撰京都名所図会』巻五）

⑹京都市北区紫野今宮町　今宮神社　神占石

今宮神社の末社の前に、平たく小さい石があって、あほかしさんとも神占石（かみうらいし）とも呼ばれる。叩いて、突いたりすると、重くてあがらないが、撫でたり拝んだりすると、かるがるとあがると伝えられる。京都の市中では、三十三間堂の前、夜啼泉の横にも、五条道祖神の前にも、ほぼ同じような石があって、叩くと重くてあがらないが、撫でるとかるがるとあがるという。ただし、この二ケ所の分は、今ではよくわからない。（井上頼寿氏『改訂京都民俗誌』）

⑺奈良県吉野郡天川村洞川　龍泉寺　なで石

大峰山の登山口では、龍泉寺の境内に、かなり大きな丸石があって、木の枠にのせられている。土地の古老によって、なで石などと呼ばれているが、宝暦年間の『本朝国語』には、「おいとしぼ」としてあげられている。それによると、「大峰参詣の人々此石を持に、或は重く或はかるしといふ。足下にふみつけ持ときはおもし、またなでさすりておいとしぼおいとしぼといふてあぐるときは、此石上る事かるし、ふしぎの霊石なり」というもので、やはりおもかる石の一つにあたると考えられる。（奈良県教育委員会『天川村民俗資料緊急調査報告書』第二）

⑻奈良県吉野郡野迫川村中　おもかる石

野川谷の中村では、富家氏の家の床の間に、それほど大きくない自然石がまつられている。富家氏の先祖が、神意を問うたという石で、やはりおもかる石の一つとして認められる。ここでも、願がかなうときには、軽くあがるけれども、願がかなわないときには、重くてあがらないという。（奈良県教育委員会『野迫川村民俗資料緊急調査報告書』）

あげ仏やおもかる石の類は、おもに形態の上から、丸石などの自然石と、地蔵などの石像とにわけられるようである。また別の観点から、特定の家に属するものと、そうでないものとにわけられ、特定の占い手をもつものと、そうでないものとにわけられるであろう。ここにあげたかぎりでは、ごくわずかな例外はあっても、多くは丸石などの自然石であって、おおむね神社や寺などにおかれており、ほとんど特定の占い手をもっていない。しかし、そのこまかな検討を進めるには、もっと多くの事例を待たなければならない。

うかがい地蔵（京都市下京区・勝円寺）

なで石（天川村・龍泉寺）

大和の民家（８）

国中の農家 ～大和棟～

松田敏行

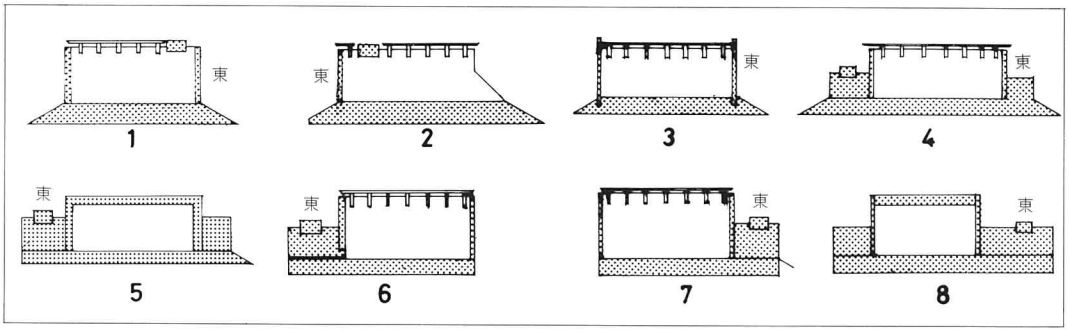
建物は間取・構造・意匠の三要素からなりたっているが、屋根はその一つ、意匠の点で大きな役割をはたしている。また雨露をしのぐのが本来の役目であり、雨量の多い我が国では特に重要である。

南北に細長くのびた我が国では気候の差異も大きく、自然の条件によって創意工夫され郷土色豊かな民家が現存している。これ等の屋根葺材料は種々様々で、草・木・樹皮・竹等の植物性から、町屋では瓦などの工業製品が使用されている。植物性の材料では、山間、特に林業の発達している場所では割板・樹皮を、平野部の農家では手近に収穫できる麦藁・稲藁・茅等を用いている。同じ草葺の屋根でも各地方によって独特の葺方の技法をもちい、棟・妻等の仕上げで地方色を表わしている。

屋根の形式は全国的に見て一番多く見られるのが寄棟造で、次に入母屋造・切妻造等である。大和棟はこの内の切妻造を基本として発達したもので、奈良県下の平野部（国中）特に天理市から桜井市を中心として広がり、大阪の河内、兵庫県の東部を西限とし、京都府下の南部から東限は三重県伊賀上野まで広がり、紀の川流域等にも点在している。

大和棟は一般的には草葺屋根の両端或は片方に落棟が付き、草葺の両妻に大壁を塗り上げ、その壁上を瓦葺（高塀もしくは卯立（うだつ））とした屋根に思われ勝ちだが、今回は初期の形式及び発生年代を追究するため、特に後世に改造されたとみられる大和棟を取り上げてみた。挿図１～３までの屋根には落棟が付いていないのに気付く、１～２図は草葺屋根の上に煙出しを付けている。また３図には煙出しがないのは背面に「つのや」が増築され「かまや」が移されたためである。いづれも両妻及び片妻に高塀を立てているが、この形式も大和棟と見てよいだろう。大和棟の特色は妻側の大壁で代表されるからである。１図の旧吉川家と３図は解体調査の結果、建設当初は前者が入母屋造、後者は切妻造から改造されたことが判明した。２図の屋根も過去に屋根葺替された際、改造されたような形跡があったと言われている。４図の民家は昭和５０年解体修理に伴なって調査された結果、万治２年頃（１６５９）に建設されたようで、当初は葺下しの屋根であったが、明和年間に現在の姿に改造されている。

１図の森村家に関しては調査されていないので何とも云えない。６図の民家も屋根葺替修理時の調査で落棟部分の梁尻に合掌の枘穴が残り、草葺の切妻造であったことが判明している。８図の屋根は土間・居室境が妻立ちとなり、一般の「かまや」・土間境の妻立ちと異なる形式はあまり見受けられない。現在



	名称	所在地	建設時代	備考		名称	所在地	建設時代	備考
1	県指定旧吉川家住宅	民俗公園内	元禄16年分家の記録あり	18C末頃に入母屋造から改造	5	角尾家住宅	北葛城郡新庄町	安永５年棟札	当初から大和棟か
1	森村家住宅	橿原市新賀町	18C初期	未調査	6	県指定細田家住宅	奈良市川上町	17C末頃	19C頃増築し切妻造から改造
2	重文村井家住宅	北葛城郡新庄町	元禄12年普請帖あり		7	山下家住宅	高市郡明日香村	文政５年棟札	当初から大和棟
3	重文旧臼井家住宅	民俗公園内	18C初期	18C末頃に切妻造から改造	8	松本家住宅	奈良市茗荷町	文久３年古文書板絵平面番付図	〃

此の部分には新らしい天井が張られ、見ることができなかったが、厨子二階の利用はいかにしていたか興味深く次の機会には調査するつもりである。５・７図は当初からの形式のようである。

以上9棟の代表例に変形の大和棟を折混ぜて列記したが、変形の大和棟の民家は大半が建設年代が古く、後世に改造していることが窺われ、その時期も18世紀後期頃と考えられる。当初から大和棟として建設された民家にもその時期頃の棟札が見られる。

では何故この様な形式の屋根が発生し発達したかを考えてみると、以前の形式は入母屋造か或は寄棟造であり、「かまど」の上に草葺の屋根が覆われているため、火災が多発したようである。次に高価であった瓦が次第に普及し一般農民にも多く使用され始めたことが挙げられる。また後には家格の表現として発達したものである。

次に構造面から時代判別してみると、建設年代の古い屋根では勾配が緩く、新しくなるにしたがってきつくなる傾向が見られる。一般には茅葺屋根を矩勾配とし、（梁間と高さが同じ）瓦葺の落屋根勾配は半分の５寸勾配とするのが通例のようである。この落屋根は大半が東側に設けられているが、西風が吹く気象条件による火災の配慮と考えられる。

次に大和棟の種々の類型について記すと

1.高 塀 造　妻の高塀が棟より一段高く築かれている。この形式では棟を瓦葺にしているのが多く、時代も新らしいように思われる。

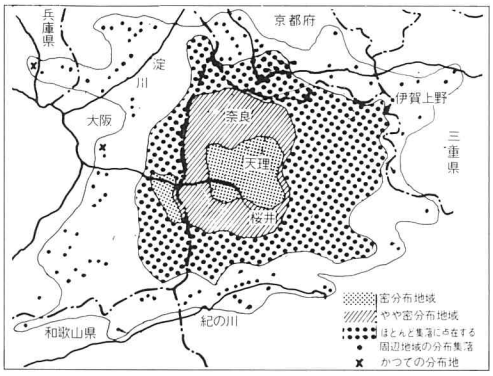
2.中高塀造　妻の高塀が草屋根面と同一の高さに築いている。時代的には３と同様古いと思われる。

3.歪高塀造　妻の高塀が草屋根面より低く築いている。

この三型が基本型とされているが、その地域によって復合型が発達し、前述のように10種類余りの型式が見られる。

河内にみられる大和棟の型式は、奈良県内とは幾分違い、高塀の瓦葺巾が３筋から４筋と広くなり、棟包みも大きな雁振瓦を使用するなどの相違がある。

結論として大和棟は18世紀中頃より発生し19世紀初期頃から末期にかけて、最も華やかに流行したようである。この伝統的な形式の屋根も近年では大半が鉄板葺に改められ、次第に消滅して行く古い民家も時代の波かと想うと一抹の寂しが感じられる。



大和棟分布図（『滅びゆく民家』より）

高　塀　造

中高塀造

歪高塀造

博物館の利用状況

当博物館は、大和民俗公園内の中心施設として昭和49年11月10日開館以来３年の月日を迎え、各方面の協力を得て博物館としての基盤を整備確立しつつある。その間他の博物館とは趣をことにした郷土の民俗資料を展示し、またその背景に民家を形成する独自の構成で活動を続けてきた。以下３年間の動向を示し今後の博物館のあり方を考えてみたい。

開館以来昭和52年８月までの入館者数は下記のとおりである。

昭和49年度　8,342人(個人 4,590人 団体 3,752人)
月間平均　1,668人

昭和50年度 21,836人(個人 9,086人 団体12,750人)
月間平均　1,820人

昭和51年度 27,389人(個人12,171人 団体15,218人)
月間平均　2,284人

昭和52年度８月現在
19,707人(個人 7,474人 団体12,235人)
月間平均　3,941人

月平均入館者の増加率は51年度は50年度に比べて25％、52年度は51年度に比べて73％の増加率であった。また個人と団体の増加率を見ると個人においては51年度12％、52年度17％、また団体については51年度６％、52年度91％の増加率であった。この傾向を見る時我々が過去３年間暗中模索で行なってきた広報活動等が、３年目にして地域社会の人々に周知徹底して来たものと理解したい。

ポスター、新聞等を通じての広報活動はもちろん、婦人会、青少年、学校関係などに特に力を注いできたわけであるが、小学校高学年の春秋の社会見学としての利用率が高いことは、社会教育施設としての当博物館を有効に利用することにより、生徒により深い理解を得させようとの考えからの来館であると解している。しかし立地条件等の関係により交通の便がかならずしも良いとはいえないので、この点が今後改善されるにつれて人々により多く利用していただけるものと解する。

現在博物館を中心として大和民俗公園が着々と整備されつつあり、重要文化財を中心とした移築民家等が完成した暁には、矢田丘陵の一角に民俗資料を中心とした野外博物館が人々の前にその全容を現わすであろう。また民俗公園に隣接して青少年の野外活動として利用できる少年自然の家も完成し、子どもの森と合わせて１日の散策コースとして利用できる、一つの文化行政地域としてユニークな存在となるであろう。

今後当博物館は郷土の人々とより密接に接し、近い将来世代編成が変わるであろうことを考慮して、早い時期に人々の協力を得て民俗調査・民俗資料の整理等の研究を急ぐ必要があると考える。また現在展示している民俗資料の内容的充実に努め、より多くの人々に利用していただきたいと思う。

また奈良県は住宅等の建設が急ピッチで進み、周りの環境が一変しようとしているこの時期に、当博物館が先人の暮らしを示すことによって今後社会を形成していくであろう人々の社会創造の一助となれば幸いである。

（吉岡　豊）

小学生の博物館見学

★★★★ お　し　ら　せ ★★★★

●民俗博物館の行事予定

10月１日～11月30日
特別テーマ展　念仏信仰～供養と祈願～

12月４日～昭和53年３月28日
テーマ展　食制具

10月９日　民俗講座〈近世大和の農村〉
10月23日　体験学習講座〈カゴつくりⅣ〉
10月30日　特別講演〈民間念仏信仰〉
11月６日　民家講座〈民家の外観〉
11月27日　体験学習講座〈灯芯引き〉
12月25日　体験学習講座〈シメナワつくり〉
１月22日　体験学習講座〈凧つくり〉

〈表紙解説〉　現在も奈良市八嶋で行なわれている六斎念仏で、この六斎念仏はお盆の時に頭屋の家で太鼓と鉦を打ちならし六斎念仏を申して、先祖の霊を供養した。この八嶋の六斎念仏は京都系の六斎念仏の系譜に属す。

■編集後記■　写真収録に出かけると村人から撮ってくれとよく頼まれる。先日も数珠繰りの調査の際「内のお婆ちゃんを」と言われたが、皆数珠を繰って背を向けているのに一人だけ直立してこっちを向いているので困ってしまった。シャッターをきるだけの優しさは持ち合わせていたのだが、とその時、情に棹さして流され行く、夥しい民俗学徒の幻影が一瞬脳裡をよぎった。（尾瀬河骨）

奈良県立民俗博物館だより　Vol. Ⅳ No.3　１９７７年１０月５日　発行
奈良県立民俗博物館 編集発行　〒639-11 奈良県大和郡山市矢田町545　☎07435③3171(代)　印刷　㈱中西文山堂